図書館利用者としての大学生
—その意識と行動—

熊　田　淳　美

はじめに

文学部国文学科と英文学科３、４年生を対象とする講義「図書館概論」の第１限は、アンケートに全員答えてもらうことから始まる。図書館についての学生の知識や関心の程度を予め把握し、以後の講義の具体的内容に活かしたいためである。

しかし、学生たちのさまざまな回答を読み進むにつれて、館種やその利用の多寡を問わず、図書館の利用のされ方を利用する側の立場から読み取れるのではないか、そして、ここに語られているのは、単に本学学生だけのものではなく、むしろ現代学生の一般的な傾向を物語っているのではないかと思えるようになってきた。

このアンケートの特徴は、類似する他のアンケートや世論調査の殆んどが回答選択式であるのに対して、学生の自然な言葉で自由に書いてもらうことにある。総括の仕方に主観が交ざりやすく、統計的処理が困難である代りに、設問側が予め想定できない回答の意外性、利用する側の本音や潜在意識を知ることができるのである。このアンケートの結果に、先行するいくつかの大学図書館利用調査を重ね合せれば、図書館の利用をめぐる現代学生の意識と行動の特徴は一層明確になるだろう。これが本稿の第一の目的である。

ここ数年、IT 化の急激な進行によって大学図書館に対する期待が高まる一方、大学そのものが大きな改革の渦中にある。本稿は必ずしも大学図書館のみを対象とするものではないが、図書館利用の実態の背景にあ

る教育、文化、社会の問題を通して、大学図書館の今後のありように一つの方向性を見出すことが出来ればと思う。これが第二の目的である。

Ⅰ．学生にとっての図書館イメージ

アンケートは2000年と2001年に行われたもの。２年分計140人は、それぞれの年度の３、４年生で、既に少なくとも２年間の大学生活を経検しており、その限りでは大学図書館２年の利用経験もある。回答は記名方式で、司書課程の受講者も含まれている。設問は簡潔に、回答は自由に書いてもらう。

以下に設問を紹介し、これに対する回答を概略する。

１、図書館に対してどのようなイメージを持っていますか。

２、図書館の利用経験とその感想

⑴　学校図書館（できれば小、中、高の別で）

⑵　公共（公立）図書館（具体的な図書館名を挙げて）

⑶　大学図書館

３、図書館をあまり利用しない人は、その理由を挙げてください。

４、図書館に関する疑問、図書館に対する注文。

(場所としての図書館イメージ)

第１の設問に対して、「静か」「静かで落着く」「静かに勉強できる場所」「静かな環境」等々、「静か」を枕にもつ言葉で図書館を捉える者が圧倒的に多かった。140人中80人、約60％である。学生の多くが、種類を問わず、図書館を静かな空間、施設として捉えているということになる。設問側からすれば、図書館の機能がどのような概念で認識されているかを知りたいが、そのためには「イメージ」という問いが適切さを欠いたのかもしれない。しかし期せずして、これほどに類似のイメージが集中するのは意外であった。それほど、「静か」ということに強い関心が集中しているようだ。「静か」「静かな場所」とだけ書き、それ以上の

説明を加えない者もあるが、この「静か」の大部分は、結局「静かに勉強できる場所」「落着いて勉強ができる場所」に集約される。多くの学生にとって、「静か」であることは、「勉強」が出来るための大きな前提条件であり、それが図書館だというわけである。

現代の学生、とりわけ、当アンケートに答えたような文科系のごく普通の大学生にとって、大学図書館にかぎらず、公共図書館、そして後述する高校の学校図書館もまた同様に、「静か」な「場所」「施設」として認識される事が多い。私など昔の学生にとっても、確かに図書館は静寂そのものの空間であった。しかし多くの場合、それが図書館利用の第一の動機ではなかった筈だ。他の目的があって、結果として、そこが静かだったということだろう。求める静かさの動機は、時代によって異なるのだろうか。

「勉強」と結びつかずとも、図書館に「静かさ」をイメージする現代学生には、日常生活の周辺に満ち溢れる騒音からの避難所となることが期待されているのかもしれない。街頭の騒音、教室内の私語、携帯電話やウォークマンの音、駅の階段を叩き付ける若い女性のミュール靴の音、若者の周囲に静かさはない。ふと大学の図書館に入った時の静けさ。図書館が音のシェルターになっているのである。学生の用語をそのまま使えば、そこに「癒し」を感ずる者さえいるのである。このことは、第4問での図書館に対する注文の中に、話し声、携帯電話等のマナーの遵守と取締りを求める者の多いことにも照応している。

それでは、「静かに」或いは「落着いて」勉強できるという場合の「勉強」とは何だろうか。後に検討するが、彼らにとって観念されている「勉強」というのは、試験勉強であり大学受験勉強だということである。より具体的に解釈すれば、それは主に教科書やノートを整理、記憶し暗記することである。暗記ほど静かな環境下での集中力を必要とすることはないのだ。彼らにとって「勉強」は「暗記」に他ならない。

教師から与えられた宿題を処理すること、レポートを作成することは、

勉強というよりも「調べる」という範疇に属するようである。今の学生は、程度の高低や規模の大小を問わず、「研究」とか「調査」という用語はあまり使わない。研究も調査も「勉強」という概念とは違うようだ。

（機能としての図書館イメージ）

だからといって、学生たちは場としての図書館だけを期待しているわけではない。施設や場所としての図書館イメージとは別に、重複はあるものの、延べ50人約40％の学生は図書館の機能面にも着目している。その多くは、「豊富に資料のあるところ」という認識から「調べるのに便利な所」「読みたい本がただで読める（借りられる）便利な公共機関」というように、図書館資料を利用することによる図書館の機能的「便利さ」を挙げている。この場合の便利さは、資料そのものが多種多様で調べごとに便利という場合と、館外に借り出せるといういずれかをいうのであろうが、学生にとっては、前者に重点がかかっている。その点では公共図書館の一般利用者とは異なるだろう。

図書館についての体系的な知識をもたず、「勉強」や「貸出」以外の利用が少なく、ゼミ発表や卒業論文作成準備の必要性が未だ少ない２、３年間の大学生活経験からすれば、機能面での図書館認識は相対的に低いと言わざるを得ない。だから、彼らの「静か」の認識の上に、便利さとか実用性といった機能性の認識が加われば、学生にとっての図書館の有用性は高まることになるだろう。結論を先取りして言えば、だからこそ、大学生活の初期段階やそれ以前の段階から図書館資料を積極的に活用できるような教育が大事だと言うことになる。

Ⅱ、学生の図書館利用経験

（学校図書館）

学生の過去及び現在の館種別の図書館利用経験を訊ねたのが第２問である。多くの場合、各種図書館で行われる利用調査というのは、自館の

利用者とサービスのみを対象として行われるから、図書館相互の利用のダイナミズムを把握する事が困難だし、そのような関心も希薄である。標本数が少く、大雑把にしか把握できないが、当アンケートはこれについて興味ある傾向を示している。

大学入学以前の図書館利用には、館種による明らかな相違が認められる。半数近い現学生は、小学校時代には、近隣の公共図書館も含めて、学校図書館をよく利用したとするが、中学校時代のこととなると、遥かに減少し、ほとんど利用したことがない、より正確に言えば、閉っていて利用できなかったと回答する者が多くなる。高等学校の図書館は再び利用率が上昇するが、それは図書館資料のためよりは、むしろ受験勉強など自習のために利用した事が多いと答えている。高校時代の公共図書館の利用も同様の傾向である。つまり、小、中、高各学校図書館の利用の頻度も性格も、学年の進行に伴って変化しているということ。そして、少なくとも学生生活前半の大学図書館にまでその名残を留め、そこに止まっているということである。

小学校時代、アンケート対象の学生の年齢からすれば概ね1980年代後半から90年代初頭、小学校の図書館の雰囲気は楽しく、むしろ騒々しいくらいのもののようであった。具体的な分野や書名を記憶していて、それを借り出して読んだとか、図鑑を見たというような記憶をたどる者が目につく。騒々しさの主な要因は、図書館での「調べ学習」のための級友同志との発見や議論のやりとりのせいであろう。小学校時代の図書館には活気があったのだ。

中学校時代の図書館は甚だ印象が良くない。鍵がかかっていることが多かったり、狭かったりで、あまり使わなかったという。実際、1992年の文部省の全国調査によれば、始業時から下校時まで開館する学校図書館は、小学校75.9%、中学校21.7%、高等学校73%で、特に中学校の落ち込みが目立っているという[①]。 実に40%近くが昼休みしか開館していないという状態だったから、学生のアンケート回答に誇張はない。

毎日新聞社と全国学校図書館協議会が行った2000年の読書調査では、学校図書館を「よく利用する」「時々利用する」者は、1990年時点での小学生で60%、中学生32%、高校生で24%となっており[②]、中学生より高校生の利用率が下がっているが、受験生としての高校生は、当アンケートの学生に見られるように、受験勉強の故に中学時代よりは高率だったのであろう。放課後や休校日を除く高校図書館は、大学受験のための静かな自習室であった。同一目的に向かう仲間が周囲にいて、「静かに」暗記中心の勉強に専念できる環境こそ受験時代の彼らには必要だったのである。高校の図書館が閉室すれば、その場は公共図書館に移動した。

しかし、高等学校図書館の利用経験者の中には、少数ではあるが、もうひとつの特徴がある。図書館の先生あるいは司書と書いているが、これらの人からの影響や指導で、読書好きの熱心な図書館利用者になったというのである。施設空間としての図書館の利用者と、一方における図書館資料の重度の利用者というこうした図書館利用の２極化は高校時代に形成され、それは不読層と多読層という形で大学時代にまで連続していくようだ。またこれも少数ながら、中、高時代におけるいわゆる「朝の読書」の経験に触れているが、それがその後の図書館利用にどのように影響を与えたかは分からない。

小学校時代に図書館を通じて培われつつあったであろう読書意欲、調べることの意欲や能力、創造力とか総合力とかいったものは、中学校段階で停止、退行してしまう。高等学校になると、学校図書館は静かな自習室という単なる施設に化すとうのが典型的なパターンである。大学図書館に対する印象も、高校時代の利用パターンの延長線上にあるに過ぎない。小学校時代のある意味では、活発な図書館利用は遠い過去の思い出にとどまっている。大学生活の中で、それを再生させることはできないのだろうか。

（大学図書館）

当アンケートで問う大学図書館の利用経験となれば、当然中京大学図書館に関するものとなる。しかし、本稿は特定の大学図書館だけを考察の対象にしている訳ではないので、ここでは、次章での言及に必要なごく一般的な特徴だけを示しておこう。本学の名古屋キャンパスには、3つの図書館があり、本館的機能を持つ閉架式中心の名古屋図書館、全面開架式のライブラリーサービスセンター（LSC）及び専門図書館としての法学文献センターから成る。豊田キャンパスには豊田図書館がある。当アンケートに答えた学生の大部分は名古屋図書館とLSCを利用する。名古屋図書館は、LSCに比べ利用者が少なく、静寂そのものである。設問第1で「静か」系を答えた者は、ここで感じた大学図書館のイメージが強く残っているのかもしれない。しかし、閉架資料が多く、学部学生は原則として入庫できないので不満が多い。LSCは、学生にとっては最も身近で、学外の利用者も含め利用は多いが、長時間の在館利用は少ない。特に試験期の騒がしさに不満が集中している。LSCにおけるAV資料の利用も相対的に多い。

（公共図書館）

公共図書館も大学図書館と同程度に利用されている。子ども時代から引き続き利用している者もある。とりわけ、名古屋市鶴舞中央図書館は、本学と同一区内で、同一地下鉄沿線にあることもあり、利用度が高く、「本がそろっている」「資料が多い」「探し易い」という高い評価を受けている。鶴舞図書館からは離れるが、県立の愛知県図書館も「資料が多い」ということで、鶴舞図書館についで頻繁に利用されている。これら大規模公共図書館は、レポートの作成その他調べもののために、大学図書館に所蔵のない資料が利用される。大学図書館で解決困難な資料はこれら図書館の資料に依存する事が多いようだ。

利用する図書館はなるべく具体的な図書館名を挙げてもらっている

が、学生の多くが居住する、岐阜、愛知、三重県内市町村立の公立図書館の利用も相対的に多いということ、休暇期に帰郷するであろう遠隔の市町村の図書館も、帰省時には結構利用されていることも推測される。学生たちは、蔵書規模や蔵書の特色によって、大学図書館と公立図書館を大差ないものと見たり、使い分けたりしている様子が窺える。学生の多くが、大学図書館と公共図書館それぞれの利用カードを持っている。

ちなみに、東京都心から離れた郊外のある市立図書館での大学生の利用状況を、雑誌『ず・ぼん』の記事がユーモアと皮肉を交えて報告している。男女ペアで現われる学生の宿題にレファレンスサービスを提供する様子や、大学教員が指定する同一課題図書への集中で生ずる大学図書館の蔵書の不足を、他館から借り出してでもカバーせざるを得ない立場、学生のリクエストによる就職対策本を収集する苦労など、大学生の質量両面での大衆化で、公立図書館における大学生への対応はなかなか大変なものらしい[③]。

Ⅲ、図書館を利用しない理由

設問の第３は、図書館をあまり利用しない学生にその理由を問うもので、回答者は少ない。なかでも多いのが「時間がない」というもの。専らアルバイトに多忙のせいだろう。ひと昔前、例えば大江健三郎氏の学生時代は、金がないから図書館に入り浸ったというが[④]、最近では、金がなくなれば外に出て何処でも稼げるし、その方が充実しているらしい。「用事がない」という言い分もある。「探している本がない」「読みたい本がない」というのは、図書館の選び方が悪いのか、結局は「本は自分で買う」と決めているのか。いずれにしても図書館をあまり信用していない。「図書館が遠い」という理由は、公共図書館が念頭にあるのだろうが、この理由は学生には通用しないだろう。

Ⅳ、図書館に関する質問、注文

設問の第４は、図書館に関する質問、注文を出してもらうというもの。内容は多岐にわたるが、図書館資料に関するものと、サービスに関するものに大別できる。

前者では、図書館とりわけ大学図書館での新刊書購入の規準、方法をさかんに知りたがっている。学生にとって、図書館の資料収集プロセスは一種のブラックボックスなのだろう。一方で、小説、新書、文庫を含む新刊書の増加を希望する者が多いことから見ると、この両者は同一要求の表と裏である。このことは大学図書館自身の問題として、また公共図書館との関係においても改めて論ずべきだろう。

後者については、館内騒音にからむ利用者のマナーや閉架書庫に関する苦情が目立つ。館種の如何を問わず、図書館職員の対応ぶりにも学生の不満は集中する。学生は、職員の親切さよりも資料を良く知っていることを重視する。この点は公共図書館における一般利用者の場合とは若干違っているようだ。

Ⅴ、現代学生の図書館利用のパターン

これまでの所、私が行ったアンケート調査の結果を出来るだけ一般化する形で、学生と図書館の関係を見てきた。しかし当アンケートの設問や回答は質量ともに限られている。ここに直接読み取れなかった部分を加えなければ、学生一般の意識や行動を描くことにはならないだろう。

以下の表は上記アンケートの結果を基礎に、先行するいくつかの図書館利用調査の結果を参考にして[5]、大学生の図書館利用の特徴をパターン化したものである。

現代学生の図書館利用パターン

パターン番号	パターン名（学生用語による）	利用動機	具体的な利用形態	主な利用対象	主に利用する図書館	図書館に対するイメージ（学生用語による）	主な利用履歴
1	勉強	試験	暗記、予習	施設（環境）	大学図	静か（落着く）	(中)高校図 公共図
2	調べる	課題、レポート、卒論	検索、調査	資料	大学図 大規模公共図	便利	小学校図
3	読書	自由	借り出し	資料	大学図 公共図	便利	小学校図 公共図
4	時間潰し（付き合い）	自由	視聴、立ち読み	施設 AV	大学図		

４つの利用パターンのそれぞれの名称は、学生の用語によった。先のアンケートに現われた用語が学生の自由な用法によるものであり、その表現自体（語彙は極めて貧弱である）に現代の学生気質が反映し、図書館専門用語によらない幅の広さが感じられたからである。ただし、パターンの分け方やそれぞれの特徴の捉え方は筆者のかなり独断的な判断によるものである。したがって、同一学生が常に同一パターンの利用行動をとるわけではないし、重複利用もある。

１．「勉強」のための利用

パターンの第１は勉強のための利用である。先のアンケートで図書館の「静か」さをイメージした大部分はこのパターンの利用者である。この「勉強」という概念は、極めて曖昧な概念だが、一般に「学習」と称する概念に近い。具体的な利用形態欄に示したように、試験前の教科書やノートの復習や暗記、語学、古典などの予習といったもの。授業科目

の成績に直結している。自ら持参する教科書、ノート、辞書類以外に図書館の所蔵資料を利用することが殆んどない。辞書を参照する以外は暗記する事が中心となる。それ故、集中可能な静かな環境が必要であり、周囲にも同様の目的をもった不特定の仲間が存在することも条件である。この条件を満たす場所と環境こそ図書館、とりわけ大学の図書館である。近隣に、静かな公共図書館があれば、そこでも良い。場所、施設利用が第一である。

思い出されるのが、受験勉強だ。今でこそ大学生なるゆえに大学図書館だが、高校時代はそれが学校の図書館であり、公共図書館だったわけだ。大学生であるとは言っても、暗記中心の勉強の方法そのものにあまり変化も進歩もない。さまざまな資料を使って思考力や創造性、総合性を強めるような勉強にはなっていない。その限りでは、大学の図書館は十分に機能していないのだ。

2、「調べる」ための利用

パターンの第2は「調べる」ための利用である。講義や演習科目の課題、宿題を処理したり、レポートや論文を作成するのに図書館資料を使うことが、この「調べる」に当たる。調べて、読んで、書く、場合によってはその結果を発表するという一連の作業を前提とすれば、これは第1のパターンで言う暗記中心の勉強とは本質的に異なる。情報を収集し、分析、評価、総合化しそれを表現するという能力がここでは蓄積される筈だ。

また後述するように、第3の「読書」というパターンとも異なる。先の小学校図書館で触れた「調べ学習」のように、本で、図書館で、「調べる」というプロセスを指すといった方が良い。問いに対する正解のみを答えるというのではなく、そこに至るプロセス、発見と創造のプロセスそのものである。それが、大学における教育というものだろう。

本を参照するとか、文献を使って調べるという意味では refer とか

consult という英語がもっとも適切だが、日本の図書館界で使われ、今や国語辞典にも搭載されているレファレンスまたはレファレンスサービスという図書館専門用語と紛らわしいので、ここでは使わない。[6]

文献を調べる、或いは文献を跋渉するというのは、図書館の本来的な機能である。図書館資料全体がいわばレファレンスブックと言ったらよいだろう。そして、調べるというのは一種の謎解きである。知的好奇心さえあれば、さまざまな発見があり、創造があり、面白さがある[7]。

先のアンケートからも読み取れるように、確かに学生たちは図書館で調べることの「便利さ」を評価してはいるようだが、その面白さを経験するまでに未だ至っていないようだ。たとえその動機が教員からの宿題であったり、レポートや卒業論文の作成であったり、動機そのものが強制であったとしても、そのプロセスから得られる面白さ、楽しさが経験できないだろうか。その経験が、更なる図書館利用の動機となるはずだ。今の大学にはそのような動機が少なすぎる。それ以前に、学生たちには、一体何を調べたらよいかが分からない。この「何を」を指示してやる、動機付けをしてやるのが教員の側だろう。現実にはこうしたインセンティブとしての宿題が少なすぎる。これからの大学の教員はそのような宿題を積極的に出してやるべきだろう。

先に見た学生たちの小学校時代の楽しい図書館の利用経験は、学年の進行につれてすっかり減退してしまった。小学校児童は「調べ学習を好んでいる。その中で児童が選ぶのは、図書資料が多い」という現場の報告もこれを裏付けている。[8]

図書館司書課程の科目に、レファレンスサービス演習というのがある。学生各人が図書館資料を使って、いわゆるレファレンス質問を処理するという演習。いわば一種の調べ学習である。受講経験学生に言わせると、この演習は非常に面白かった、これまでこのような調べる面白さを知らなかったという。同様の事例は他大学の場合にもみられる。[9]

最近の図書館における「調べる」利用を可能にし、面白くしている最

大の要因は、コンピュータ目録とインターネットの発達である。現代の図書館利用法のなかで最も便利になった部分こそ、この「調べる」機能である。従来の図書館では資料の検索が大変だった。その点では今の学生は極めて恵まれている。居ながらにして、多様なアクセスポイントからさまざまな図書館の目録の検索が出来る。活字情報に依らずとも入手可能なインターネット情報も増えてきた。このように便利になってきたからこそ、従来の方法では容易に発見できなかった活字上の情報が発見し易くなり、知的資源としての潜在的価値を大いに活用できるようになってきたのである。それ故のOPACであり、インターネットのはずである。ところが、学生たちのインターネットの利用は、多くの場合、情報の直接入手のためで、OPACなど文献の入手に関わるものはその半分にも達していない。⑩

学生にとっての情報とは解答直答型の情報で、求める情報が直接パソコンの画面上に発見できなければ、それは無しで済ましてしまう。検索できないものは即ち存在しないのである。しかもその情報検索の技法さえ覚束ない。何よりも、語彙や常識が貧困で、検索語が十分でないし、それを総合的に判断する能力も不足している。情報そのものは氾濫しているにもかかわらず、それらを選択、評価できないのもそのためである。

情報検索の技法に習熟する以前に、情報の内容や価値を判断する基礎能力が必要だ。そのためにも、先ずは活字資料や文献を「調べる」能力を養い、トレーニングを重ねる事が実践的かつ捷径なのである。

その意味で、今後の図書館、特に学部学生を利用者とする大学図書館の役割の大きな部分は、大学教員との連携だろう。先に強調したように、教員側は学生に「調べる」ことを伴う宿題を大いに課する。図書館がそれをサポートするという図書館と教員間の連携が必要だ。そのことで、大学図書館は学生のための本来機能を発揮できるであろう。

3、「読書」のための利用

いくつかの読書調査が行われ、最近の大学生の読書傾向が知られている。学生のほぼ半分が書籍を読まず、その比率は製造業や無職の人と同程度であること、然るに80%以上の圧倒的多数の学生がマンガ雑誌を読んでいること[11]。学生の主たる読書目的の１位は趣味･娯楽のための70%、２位は勉強のための42%であること、読みたい本は書店から買うというのが70%近くで、図書館を利用するのは12%程度（前年度は45%）だということである[12]。また、別の調査によると、大学生の読書傾向は、１ヶ月間の読書量が０冊の25%、１～３冊の50%、４冊以上の25%に３分されるというし、本の入手・利用法で、書店から購入するのが73%、自大学図書館が47%、公共図書館が38%だという[13]。

これらの調査に見られる一般的な傾向は、本と雑誌を区別するとしても、「読書」量を冊という単位で測定している事である。少なくとも日本では、伝統的に１冊まるまる完読するのが「読書」であり、それ以外は「読書」とは言わない傾向がある。そうした「読書」が推奨され、評価される。さまざまな資料を跋渉し、拾い読みするというような「調べる」ための読み方は、「読書」という概念から排除されているのである。従ってそのような読み方の実態は把握できないし、問題にもされない。

そのような「読書」調査であるとすれば、学生の読書傾向の調査と図書館の利用調査とは、むしろ切り離して考えた方がよい。読書と図書館の利用とは絶対の相関関係にはないのである。好意的に言い換えれば、読書量がゼロであったり、少ない学生であっても、彼らは図書館では多種多様な資料に接し、調べ、知識を蓄積しているのだと。

こうした前提で本題のパターン３を見てみる。ここで言う「読書」は件の伝統的「読書」である。その読書を図書館内部で行うか、借り出すかは利用者の自由だし、それだけ便利だ。

世論調査にみるように、今の大学生はマンガを含め、楽しく、面白く或いはミステリアスな書物を好む。これらの多くを書店で購入して読む。

或いは購入者から借りて読む。さもなくば、これらの書物は原則的には大学の図書館には所蔵されていないから、近隣の公共図書館から借り出すことになる。大規模公共図書館には専門文献も多いし、開架率も高いので、レポート作成などのために、これら大規模図書館が活用されることも多いが、一般的な読書のためには、近隣の公共図書館が利用されているようだ。今や、公共図書館特に都市部の公立図書館は大学生のための図書館にもなりつつある。その状況の一斑は既に紹介した。

こうなると、最早や学生にとって、大学図書館と公共図書館との機能的役割の区別はなくなってきている。その時々の自分の要求に見合った資料が充実していて、時間的にも距離的にも便利な図書館が彼らの図書館である。上手に使い分けている。しかし、それで満足しているわけでは決してない。

どこの大学でも、大学図書館（図書館だけでなく大学全体に対するものを含めて）に対する注文や期待で最大のものは、「書籍の充実」である[14]。アンケート調査にも現われていたようにその具体的内容は、「新しい本」であり「教養的な読み物」であったりする。要するに、公共図書館が一般成人利用者のために収集するであろう同様の書籍の大学図書館における不足を不満とし、その充実を求めているのである。専門資料の不足を訴えているわけではない。

学生は大学図書館に公共図書館的性格をも期待しているのである。

電子図書館的資料を含め、学術専門資料の収集に集中し、「調べる」ためのインセンティブもないとなれば、施設としては兎も角、機能としての大学図書館は教員だけのものに変貌してしまうだろう。大学の大衆化は、大学図書館が利用者としての学生の要望を相当程度受容すべき所に来ている。しかし、これは利用者に迎合する事ではない。若い学生の心情の中に娯楽性と探求性が共存し、それを上手に誘導するのが教育だとすれば、大学図書館という場における教員と学生との共存もまた可能であろう。

一方の公共図書館でも、利用者としての大学生との折り合い、特に資料構成の上での折り合いをどのようにつけていくのか。財政事情が困難になるほどに、大学図書館と公共図書館それぞれが利用実態、利用ニーズを把握し、情報交換と相互の理解を重ねていくことが必要であろう。

利用パターンの第４は、図書館、特に自学図書館を時間潰しの場として利用するというもので、専ら娯楽用 AV 資料を館内設備を使って利用する。

このパターンについて最早本稿では扱わないこととする。

Ⅵ、これからの大学図書館

現大学生のアンケートや調査を通じて、大学図書館ばかりでなく公共、学校図書館を含む図書館を、彼らが利用し、利用した意識と行動を分析し、評価してきた。端的に言うと、図書館が持っている折角の可能性を、学生たちは十分に活かしきれていないということ、その原因のひとつに、教える側の問題があるということである。大学の教員はもっともっと学生に宿題を出して、大いにインセンティブを与えてやった方がいいということである。

最近、気になることがある。学生のレポートや試験答案を読んでいると、論旨や文章はしっかりしていて雄弁だが、内容が空疎で、説得性のないものが増えてきているのである。自分で勝手に思い込み、感性だけで書いている。評論家の発言や文章のコピーといった印象が強い。数学問題で言えば、解答だけが書かれているようなものだ。そういう学生に、「調べて、考えて、それから書きなさい」といってやる。事実や記述の検証のない勝手な主張だけのレポートは書いてこなくなるだろう。

グローバル化、IT 革命、一方における少子化の中で大学の改革が急速に進行している。大学図書館もその一環だろう。これら改革の基礎になっている大学審議会の1998年10月の答申「21世紀の大学像と今後の改革方

策について」や2000年11月の答申「グローバル化時代に求められる高等教育の在り方について」の中で、大学図書館は直接言及されてはいない。具体的言及がないとはいえ、これらの答申が強調している情報通信技術の活用という面での図書館の機能強化は今後ともますます必要であろう。

しかし、問題はこれらの答申が目指す目標と実態との乖離の大きさである。これまで見てきたように、大学図書館を現に利用している学部学生の意識と行動と今後大学図書館が目指そうとしている高度の技術的側面との差は大きい。利用する側の学生の実態との距離はますます大きくなるだろう。体力と練習不足の選手にいきなりオリンピックのメダルを期待するようなものだ。何事によらず、改革を進めるためには、先進的な部分と後進的な部分との異なった対応を考えるべきだろう。

大学図書館と大学教員とが連携して、それ自体大規模な記憶装置である図書館利用の活性化を図ること、本稿の論旨からすれば、学生への課題を増やすことは、かなり独断的だが、さしずめ後者に対する具体的提案のひとつである。

(注)

① 日本図書館協会編刊『図書館はいま－白書・日本の図書館　1997』1997, p.85

当アンケート対象となった学生たちが小中高時代を過ごした1990年代中期以降の学校教育の実態と、前述した「勉強」観や学校図書館の利用経験の傾向は、刈谷剛彦氏が指摘する1990年代以降の子どもたちの勉強観と通底する所があるように思われる。(刈谷剛彦『「学歴社会」という神話』(NHK人間講座), 日本放送出版協会, 2001.12, 特にp.89－103参照)

② 1990年と2000年の調査の比較：中学生については1990年の27%は、2000年では32%に上昇している。『読書世論調査　2001年版』毎日新

聞社，2001，p.125

③　としょかん三郎「カウンターからの学生サンたちの風景―図書館にくる困ったやつ」『ず・ぼん』No. 4，1997.12，p.142－145

④　立花隆ほか『二十歳（はたち）のころ』新潮社，1998，p.139

⑤　1．大阪教育大学生涯教育計画論研究室編刊『大学生の読書と電子メディア利用に関する調査研究』2000

2．三重大学編刊『学生生活実態調査報告書2000年度』2000

3．切石文士・岡田茂「大学生の図書館利用の状況と課題」『図書館学』（西日本図書館学会）第66号，1995

4．岡田靖「大学生の図書館利用に関する調査報告と分析」『鶴見大学紀要　第4部』第32号，1995

5．岡田靖「大学における学生の図書館利用に関する調査報告　その2」『図書館学会年報』40－4，1994

6．小川隆章「高校生・大学生の時期の図書館利用の特徴」『読書科学』（日本読書学会）41－1，1997

7．宍戸奈美「大学図書館におけるOPACの利用者の探索行動」"Library and Information Science" No. 37, 1997

8．毎日新聞社編刊『読書世論調査』各年版

9．「読書週間　世論調査」（『読売新聞』2000．11．1、2001．11．3など）

10．武蔵工業大学環境情報学部図書館編刊『環境情報学部図書館の現状と将来』2000

⑥　『広辞苑』（岩波書店）は第4版以降、その他『新明解国語辞典』（三省堂）、『大辞泉』（小学館）など。

「レファレンス」なる言葉は、専ら日本では図書館界の用語として使われ、図書館の側が利用者に対して提供するサービスのひとつとして定着している。本来、人に「参照させる」「調べさせる」という意味の動詞 refer から発しているはずだが、図書館におけるその主客関係

の認識が曖昧で、一般利用者には分かり難くなっている。それでいて、図書館側は、その浸透度が低いことに焦っている。このことは別途検討する必要があるだろう。

最近では、その辺の状況が意識されているのかいないのか、「セルフレファレンス」なる用法が登場している。（斎藤文男「図書館利用者にとってのレファレンス・サービス」『東京都図書館協会報』 No. 81，2001，p. 1）

⑦ 図書館を使う面白さについて何年か前に書いた事がある。熊田淳美「図書館を使う面白さ」『中京大学図書館学紀要』第17号，1996，p. 1－14 その考え方はここで言う「調べる」ことの面白さをいっている。

ごく最近、この面での優れた啓蒙書が相次いで現れた。

1．辻由美『図書館であそぼう－知的発見のすすめ』講談社，1999

2．『まちの図書館でしらべる』同編集委員会編，柏書房，2002

⑧ 早坂ひとみ『情報を適切に選択・判断する力を育てる読みの学習』（平成10年度東京都教育研究生研究報告書）1999，p. 5

⑨ 『相模女子大学図書館学教育40周年記念誌』2001，p.43

⑩ 前出 ⑤－1，p.60

⑪ 前出 ⑤－8，2001年版

⑫ 前出 ⑤－9，『読売新聞』（2001．11．3朝刊）及び「同調査属性データ」

⑬ 前出 ⑤－1，p. 3，19

⑭ 前出 ⑤－1，p. 3、⑤－3，p.73、⑤－10，p.97